

開催報告

令和2年度 北海道青少年育成大会

令和2年9月4日(金) 北海道立道民活動センター(かでの2・7)【札幌市】

青少年育成活動の推進を図るため、全道から約170名の関係者が集う

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から「新北海道スタイル」に配慮し、開催しました。

午前は、北海道青少年基金事業顕彰の表彰式や、^{そえじま まさかず}副島賢和氏(昭和大学准教授)によるオンライン講演、午後からは、北海道高校生ネットワーク「BLOSSOM」による「青少年の活動発表」に続き、「札幌市若者支援総合センター」と「釧路鳥取てらこや」の活動について「事例発表」が行われました。

北海道青少年基金事業顕彰の表彰式

道内で優れた地域活動を展開している青少年団体・功績を讃え、当協会の竹谷会長から「尾岱沼下の句カルタ少年団」(別海町)に、賞状と記念品が贈られました。(写真右)

※団体詳細につきましては、7ページをご参照ください。

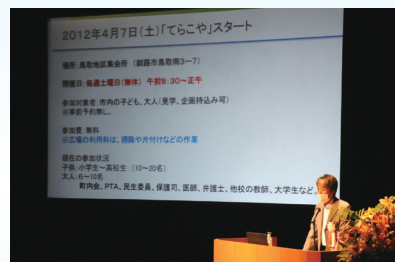
青少年の活動発表 ー北海道高校生ネットワーク「BLOSSOM」ー

代表の鈴木さん(札幌国際情報高校)など3名の生徒から、団体設立の経緯や活動内容の紹介、また、今年3月、新型コロナウイルスの支援活動として自分達でデザイン・設計から考えた手製のフェイスシールドを医療現場に届けた際の様子や医療現場からの声などの発表がありました。

2団体の事例発表

ー札幌市若者支援総合センター、釧路鳥取てらこやー

札幌市若者支援総合センターの松田館長から、困難を抱える若者からの相談をふまえた、地域連携の仕組みづくりについての発表、また、ネイバル厚岸の森所長からは、「釧路鳥取てらこや」が取り組んでいる市内の子供達を対象とする学習サポートや遊びを通しての多世代交流、子供たちの居場所づくり等についての発表がありました。(写真左:松田館長/写真右:森所長)



基調講演

演題「コロナショックにより傷つきを抱えた子ども達への関わり」

Zoomによる
オンライン講演

昭和大学 准教授 ^{そえじま まさかず}副島賢和氏



はじめに

私は、都内の病院内学級で疾病を抱え入院している子ども達に勉強を教えています。皆さんの地域にも何らかの理由で心や体が傷ついている子どもが必ずいます。今日は、身近にいる悩みを持つ子ども達を思い浮かべながら聴いてください。

子どもにとっての喪失とは?

病気の子供達は、築き上げてきた仲間や家族との関係、将来の夢や希望、学ぶ機会など、たくさんものを喪失することが多く、否定的な自己イメージが強くなります。

病院では良い患者であるため自分の感情に蓋をし治療に向き合うこともあり、本来の子どものとはほど遠い姿です。なので学ぶ機会を作り肯定的な自己イメージを育てたいです。子どもにとって学ぶことは生きることです。すべての子どもに学びの機会を保障していきたいと考えています。

今を生きる、今を味わう

傷つきのある子どもと接する時は、「自分が『今』感じている感情は間違っていない」と思えるように働きかけることが大切です。今、感じている感情や感覚と一緒に味わってくれる

人がいるということを伝えることです。「おいしいね」と言ったら、「おいしいね」と。「何かくさいね」と言ったら、「そうだね、くさいね」と。

傷つきのある子どもと関わる基本は、『今』としっかり向き合うことで、それが、その子の生きる力になるのです。『今』に向き合っていると前向きなエネルギーが出て、生きる力が溜まっていくと感じます。

ご自分の感情を大切に

今、小児がんなどの慢性疾患で入院している子どもは2割で、残りの8割の子どもは日常の生活の中にいます。実は、私たちの周りには病気や心の痛みを抱えながら生活している子どもがたくさんいます。

そうした子どもの感情を受け取って欲しいのですが、たとえ相手が子どもであっても、感情を受け取るということはとても難しいことです。

まずは、私たち大人自身が自分のつらさや苦しさといった感情を渡せる仲間と時間と空間を持つことが大切です。

傷つきを抱えた子ども達も周りの大人の人、みんなが共に生きていく社会となることを願っています。